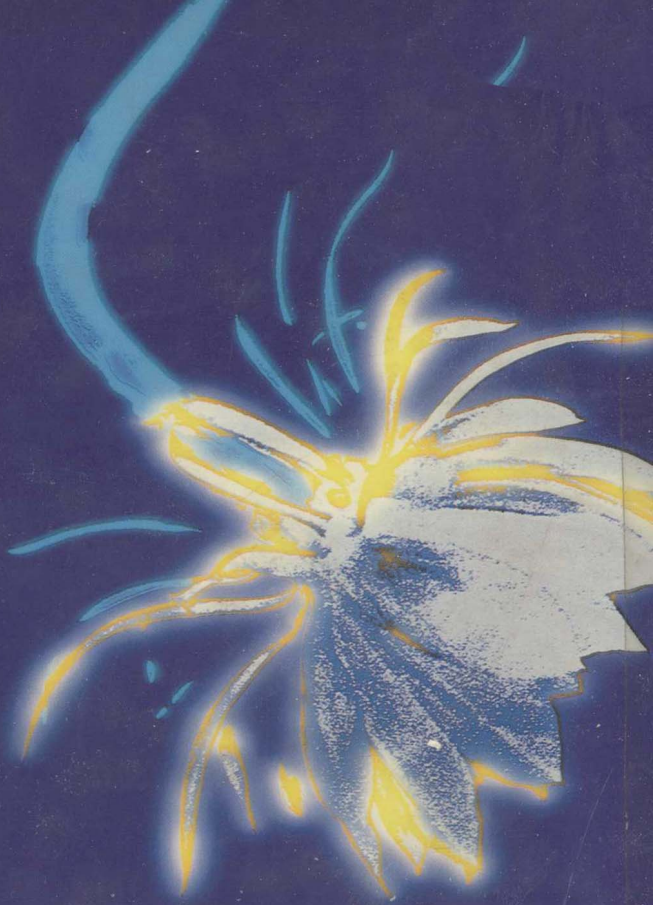


月下美人

吉村昭





月下美人

吉村昭

講談社

げつかびじん
月下美人

一九八三年八月二十日 第一刷発行

著者——吉村 昭

© Akira Yoshimura 1983, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号三三 電話東京〇三—九〇一—二二（大代表） 振替東京—元言

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一、二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200658-8(0) (文1)

目次

月下美人	5
沢蟹	67
時計	85
甲羅	101
秋の虹	121
夢の鉄道	155
欠けた月	173
冬の道	203
初出一覧	226

装 幀
秋 山 法 子
写 真
竹 上 正 明

月下美人

月下美人

一

郵便物の中に、茶色い封筒がまじっていた。差出人は未知の人であった。

封を切ると、ガリ版刷りの藁半紙が出てきた。新たに出版された単行本の出版記念会の案内状で、著者菊川三郎を励ましたいので出席して欲しいと記されている。会の催される日時は、六日後の日曜日の午後六時半からであった。

その単行本は新聞社の編集局から出版され、半月ほど前に菊川の署名つきで送られてきていた。著者と言っても、主として北海道在住の民衆史研究家が菊川の口にする回想を記述したもので、菊川は共著者になっている。出版後、新聞、雑誌の書評欄に好意にみちた紹介がされ、殊に菊川が自らの過去を大胆に告白したことに讃辞を惜しまぬ、といった趣旨のものが多かった。

私は、正月が明けた頃から風邪にとりつかれ、三月中旬に発熱を押して渡米したことが影響し

て帰国後も体調がすぐれず、それは夏が過ぎても変わらない。精密検査を受けて異常がないと診断されたが、外出は出来るだけ避け、夜はほとんど家から出ることはなかった。が、私は、菊川の出版記念会には出たかったし、出なければならぬ、とも思った。

かれと知り合ってから十年足らずにしかならないが、私は、かれとその家族に一種の罪をおかしているような意識をいだきつつけてきた。すべては、私がかれの前に不意に姿を現わしたことから始まったことで、つましい生き方をしていたかれが、停止していた機械が突然唸りをあげて動き出したような激しい動き方をしめし、それによってかれの家庭も大きく揺れ動き、それは今もってやむことはない。つまり私が出版記念会に出席しなければならぬと考えたのは、かれとかれの家族に対する贖罪の気持からであった。

私は、菊川宛に出席の旨を電話で伝えようと思ったが、公の意味をもつ集いであるので差出人である会の世話人に返事を書くべきであると思い直し、筆をとった。文面は通常の出席通知の域を越えた感情のこめられたものになり、必ず出席させていただきます、と、末尾に重ねて書いた。

二

私が初めて菊川に会ったのは、私の留守にかかってきた或る男からの電話がきっかけであった。外出先から帰宅した私は、妻のメモしてくれた紙片を手にした。

そこには、昭和十八年初冬、反戦組織の一員であった霞ヶ浦海軍航空隊の若い整備兵が軍用機

を爆破、捕えられた後、脱走したことが記されていた。それにつづいて、最近、偶然にもその元整備兵を見かけたのでひそかに勤務先を探り出したが、関心があるなら会ってみてはどうか、と指示していた。電話をかけてきた男は、旧海軍の法務関係に属し、事件関係書類を眼にしたことがあると言ひ、Yという姓だけを告げて電話を切ったという。

私は、その姓に記憶はなく、試みに書架にある海軍法務関係者の名簿を繰ってみた。が、Y姓の者は見当らず、念のため関係者の一人に電話でたどしてみたが結果は同じで、男が偽称して電話をかけてきたことを知った。

その後、男から電話はなく、私はメモを放置していたが、日がたつにつれて落着かなくなつた。男は、元整備兵が昭和十九年二月に逮捕され五月に脱走したと言つたというが、年月を伝えてきたことに事実らしい感じがあつた。もしも、男の言葉どおりであるなら、元整備兵は戦時下に極刑に相当する罪を犯し、脱走に成功して現在でも生きてゐることになる。私は、元整備兵が戦時を、そして終戦後二十余年をどのように生きたかを知りたいような氣にもなつた。

一ヵ月ほどした頃、私は、メモに記された元整備兵の勤務しているという東京郊外の市役所に電話をかけてみた。Yと称する男が偽名であつたことから考えても元整備兵が実在してはいないだろうという氣安さが、ためらいもなく私に受話器をとらせたのだ。

女の交換手が出て、私が菊川の名を告げると、交換手の声の代りに呼出し待ちの音楽の旋律が流れてきた。私は、女のさりげない応答に、菊川という男がYの指摘通り市役所内に実在してい

るらしいことを知り、うろたえた。

音楽が中断し、少し東北訛のある屈託のない男の声がきこえてきた。

私は、自分の姓名と職業を告げ、メモの内容を口にした。男の声が絶え、もし、もしと言うと、はいという声をする。その声はかき消えるように低く、男が受話器を手に身じろぎもせずにいる気配が感じられた。

私は、当惑した。はい、という男の言葉のひびきに、かれが過去の発覚をおそれて日を過していることが知れた。ようやく安息を得るようになっていたはずのかれは、私からの電話で過去を知る者がいることに気づき、恐怖を感じているにちがいがなかった。

私は、出来ればあなたの体験をきかせてもらいたいと思ったが、御迷惑らしいので断念する、と言った。さらに、再び電話はしないが、もしも話してもよいという気持になったら連絡して欲しい、と伝え、家の電話番号を教えた。

受話器を置いた私は、重苦しい気分になっていた。元整備兵がYと称する男の指示した通りの市役所に実在していたことに驚きを感じると同時に、自分の行為が一人の未知の男を激しくおびえさせる結果になったことを悔いていた。おそらく菊川という男は、私からの電話で仕事も手につかず、眠れぬ夜を過すにちがいがなかった。

私の電話はあきらかにかれに動揺をあたえたらしいが、私はまだかれの過去を知ったわけではなく、元整備兵であるという証拠も得ていなかった。それをたしかめるため、厚生省恩給局に勤

務する人に電話をかけ、菊川の軍籍について調べて欲しいと依頼した。その部門では軍人恩給業務の必要から旧陸海軍人の資料が整理、保管されていて、戦時を背景とした小説を書く折にしばしば訪れていたもので親しくなった局員がいたので。

局員は承諾し電話を切ったが、一時間ほどすると電話をかけてきた。菊川は大正十四年十月生れで、昭和十六年六月に横須賀海兵団に入団、同年十二月に海軍少年飛行整備兵として霞ヶ浦航空隊に配属になった。兵籍番号は横志整九〇一一。隊の性格上朱の文字で戦死と書かれている者が多いが、かれの欄には逃亡という文字が記入されているという。私は、礼を言つて受話器を置いた。

はい、という男の低い声がえつた。Yという男が口にしたことは事実らしいと思うとともに、菊川の年齢が想像よりも若いことが意外だった。大正十四年生れというと、脱走したのは十八か九歳ということになる。一年七ヵ月年下の私は、かれに親近感に似たものをおぼえ、弱年のかれにとって戦時という時間がどのようなものであったかを知りたい気持ちがつのつた。

私は、かれからの電話を待ったが、望みがほとんどないことを知っていた。現在も逃亡兵としての意識をもちつづけているらしいかれが、一度電話をかけただけの私に、すすんで自らの過去を話すことなど考えられない。かれに再び電話はしないと約束しただけに、私の方から連絡をすることもできなかった。

私は諦めていたが、思いがけず望みがかなえられた。

四日後の朝、家に電話がかかってきて、受話器をとると、菊川です、という声がきこえた。相変らず低い声であったが、話したいから午後七時に家へ来てくれと言ひ、住所を口にした。電話があつてから悩みぬいたが、思い切つて話をした方がいいと考えたのだ、と、かれは言つた。その声には、意外にも私にすぎるような哀願のひびきがあつた。

その日の夕方、私は郊外にむかう電車に乗り、さらに支線に乗りかえて怪しい駅に降りた。晩秋らしく、空気は冷えていた。

かれが住んでいたのは、公営団地内にある棟割りの二階家型式になっている住居だった。ドアのかたわらにあるベルを押すと、薄茶色の長袖のワイシャツを着た男がドアを開けてくれた。私は、男の後について軋み音を立てる狭い階段をあがつた。

私は、四畳半の部屋で男と向き合つて坐つた。かれから渡された名刺には、市役所の建設課で現場主任をしているという肩書が印刷されていた。壁を背に置かれた二つの本棚には書籍が並び、その部屋がかれの私室であることをしめしていた。

かれは、電話の声から想像していたものとはちがつて、頤が張り骨格も逞しい。髪は黒く艶があり、生え際から密生していた。

菊川は刺すような眼を向け、あらためて私がどのような経過で自分の過去を知ったかを問ひ、私はＹという男からの電話の内容を詳細に口にした。かれは首をかしげ、その姓の男に記憶はないと言つた。

私は、ノートを開き、かれの出生地を問うことからはじめた。

かれは、福島県の貧しい農家に生れ、尋常高等小学校を卒業後、海軍少年航空兵を志願し横須賀第一海兵団に入団した。が、そこまで言う口をつぐみ、私を見つめた。

「今まで誰にも話したことはないんです。家内にも……」

かれの眼の光が、さらに鋭さを増した。その眼には、過去を知られたことによって話さなければならなくなった私に対する憤りと、憎しみの色が浮び出ていた。

かれは、抑揚の乏しい声で話しはじめ、私はノートに万年筆を走らせた。

階段に足音がし、かれは口をつぐんだ。面長の女が、茶と菓子一盆にのせて部屋に入ってきた。かれは、妻だと言ひ、私を戦時中お世話になった方だ、と女に紹介した。

私は、戸惑いながら彼の妻に挨拶した。女は、階段をおりていった。

かれは、再び口を開いた。私は、メモをとることに専念した。

かれの回想からは、奇異な世界がひらけていた。奇異とは言っても、それは戦時下の日常的な匂いが濃くたちこめたもので、少年であった私の接していた時間が鮮やかによみがえってくる。

かれが自転車で逃亡途中に渡ったという橋は、私も知っていた。古釘の頭が浮き出た木の欄干の朽ちかけた粗い肌の感触も思い起される。馬糞が土埃とともに舞いあがっていた道、鉄工所の前を通る時に鼻をかすめる鉄錆のにおいなどが、かれの話の背景として浮びあがる。

かれの記憶は驚くほど克明で、日時、天候、地名、人名などが淀みなく口から流れ出る。長い

間の沈黙が破れ、それが一時に堰をきったように、かれは自分の言葉がもどかしそうにしばしば坐り直しては話す。その間、かれの視線は、険しく私に据えられたままであった。

部屋に置かれた時計の針が、十時過ぎをしめしていた。私が後日、話のつづきをきかせて欲しいと頼むと、かれは無言でうなずいた。

私は、ノートを閉じ、腰をあげた。

かれの家を出て団地の中の道を歩きながら、私は、かれの回想から一人の若い男の像が鮮明に浮びあがってくるのを感じ、近日中に回想の後半をどうしてもきき出したいと思った。私は、森閑とした道をバスの停留所の方へ歩いていった。

翌早朝、私は妻に起された。菊川という人から電話がかかってくると言われ、床をはなれりと階下におり受話器をとった。菊川は、今夜、話のつづきをしたいから家に来て欲しい、と口早やに言った。いったん沈黙を破ったかれは、話したい衝動を抑えることができなくなったらしく、その声には苛立ったひびきがあった。私は、喜んでうかがうと答えた。

その夜、私は、前夜と同じ時刻にかれの家を訪れた。話を正確にきくためにテープレコーダーを携えていったが、録音してもよいかとためらいがちにたずねると、かれはあっさりと承諾した。私はセットし、ノートもひらいた。

かれは話しはじめたが、前夜と異って話し方は熱をおびしばしば声が甲高くなった。私と接することになれたらしく、かれの眼は時折りやわらいだ。かれは、かすかに笑うこともし、私も口